

鑄物 言葉



文／NIT・新山英輔
画／IJS・内田敏夫

【いもの】

「いもの」はいうまでもなく、「いるもの＝鑄る物」、あるいは「いたもの＝鑄た物」のことですから、鑄物の源としては「いる」の語源を探らなければなりません。

「いる＝鑄る」については(1)溶融金属を鑄型に「い(れ)る」もしくは「(は)いる」からきたという説と、(2)「湯」を動詞にした「ゆる＝湯る」からきたという説があります(日本語ではユの音とイの音は相互に通じる。ユクとイク、カユイとカイイ、など)。しかし、考えてみると注ぎ込む動作やその対象は水をはじめとしていろいろあるのだから、(1)説だと「入れる」動作は何でも「いる」になりそうなものなのに、じっさいは金属溶湯にしか使われないのは不自然に思われます。だとすると金属専用の術語として「湯る」が使われたという(2)説のほうが妥当ではないでしょうか？

それでは「ゆ」はなぜ「ゆる」なのか？ 古来の日本語では「ゆるい」「ゆるみ」「ゆたか」「ゆとり」「ゆるす」「ゆるずる」「ゆだねる」「ゆれる」など、何らかの余裕・自由を有する概念に「ゆ」という音が使われることが多かったようです。こういう語感から、冷たく、きびしい水を温めて「ゆるんだ」ものが「ゆるみず」あるいは「ゆ」と呼ばれるようになったのだと考えられます。

もっとも 40℃くらいの水なら「ゆるくて」気持ちいいけど、100℃の水はどうみても「ゆるく」はないです。しかし、人は語源なんかすぐ忘れてしまうものですから、いつのまにか高温の液体であれば沸騰水も溶融金属もすべて「ゆ」ということになってしまったのでしょう。

というわけでまとめると；温かい水は「ゆるみず」ー略して「ゆ」ー熱い水も「ゆ」ー溶けた金属も「ゆ」ーそれを型に注ぐ動詞が「ゆる」ー音が変化して「いる」ーその動作の結果が「いるもの」もしくは「いたもの」ー略して「いもの」ーというつながりになります。

ところで時代はいつころかという、鑄造技術は漢字よりもずっと前の紀元前3世紀ころに日本に輸入されていますから、「ゆ」とか「いもの」とか「かた」などの基本的な専門用語は大和言葉で独自につくる必要があったはずで、そして、紀元1世紀以来漢字を覚えはじめた日本人が後年これらに「湯」「鑄物」「型」などの漢字を当てたのです。ちなみに本場の中国語ではそれぞれ「溶融金属」「鑄件」「模形」であって、日本人がこれらの表記を採用しなかったことをみても、漢字輸入以前に独自のヤマト式鑄造用語がすでに確立していたことが分かります。

以上、何しろ古代日本語の語源というのは文字の記録も証拠もない時代に起こったことですから、学者の説を拝見してもかなり自由奔放です。それをいいことにして私も私見と独断をすこし交えてテキトウにまとめました。